

ロマン・ロオランとクロボトキン

238

一九二一年二月ピエル・クロボトキンの訃が伝へられた時、巴里の『レ・タン・ヌウボオ』誌は同僚、知友、名士等五十名ばかりの追憶文を掲げて、特別紀念号を出した。其中にロマン・ロオランは言つてゐる。

「クロボトキンの、あの聖なる相貌を一心に想ひ起さうとする時、其著『一生活の周囲（一革命家の思ひ出）』が私に投げてくれたもの、彼が私の心に残してくれた光明の跡、に就いて言はふとする時、私は実に慈父に対する様な感謝なしには、それを考えることは出来ない。

御承知の通り私は非常にトルストイを好いた。併し、私はいつも、クロボトキンはトルストイが書いた処の其人である、といふ印象を持つてゐた。彼は悩める天才のトルストイが一生涯欲求した

——而も単に其芸術にでだけしか到達し得なかつた——処の完全な人類愛、静肅な献身、清節の理想を、極めて自然に單純に其生活上に実現した……」

ほんとうにクロボトキンの生涯は超芸術の芸術であつた。芸術を超えた詩であつた。美しい自然の人類詩であつた。

二

ロマン・ロオランはクロボトキンを想ふ度に、慈父に対する様な感謝を禁じ得ないと言つてゐるが、是には恐らく何人も異存がないであらう。然るに此聖者を産んだ国は、少くとも其肉体を産んだ国は、あの荒鷲の住む、専制暴圧のツァール治下の露西亞であつた。そして露国革命の大母カテリン・ブレンシコヴスカヤが言つた様に「露西亞人が欧羅巴に負ふのではなくて、欧羅巴こそ露西亞人に感謝すべきだ。運命は、露西亞の最も貴い宝、其土地に産れた最大の精神、最大の人物をして、故国を去り、他国に於て生活し活動することを余儀なくせしめた。ヘルツェン、バクニン、ラヴロフ、プレカノフ、メチニコフ、クロボトキン、其他多くの科学と人道との巨人達は、総ゆる思想の方面に於ける多大の貴重な労作を西欧に寄与した。」

国家乱れて忠臣あり。専制暴圧の露国にして初めて自由の聖者が生れたのだ。自由の聖者達を産む為の露国の悩みこそ、トルストイの天才的懊悩を最もよく説明するものではないか。百年來、露西亞

が演じ出した大きな悲劇の一役者として見る時は、ヘルツェンや、バクニンや、ラヴロフや、クロボトキンや、トルストイや、乃至はツァールや、レニンやは、何れも其綜合劇の一分子に過ぎない。

けれども此綜合劇の中から、浮彫の如く働いて出るトルストイ、バクニン、クロボトキン等の姿を見ると、其露西亞劇に現はされた活動は、何れも彼等の片鱗の閃きに過ぎない。彼等の舞台は世界であつた。彼等は露西亞の胎内に生れたが、併し彼等の魂、彼等の生命は宇宙の渾らかな深い泉から湧出したものである。宇宙的人類が創造したものの傑作中に数へらるべきものである。暴戾な露國を縁とし此の様な成果を齎した人生其のものを奇しくも尊とき創造者ではないか。偉大なる芸術者ではないか。

三

青年ヘゲル学徒中の逸足、アーノルド・ルウゲが、ドレスデンに於て発行した『Deutsche Jahrbücher』に掲げたバクニン (Jules Ellyard といふ変名にて) の文中に有名な一句がある。

曰く「全生命の永遠の創造者であり、測り知り難き泉であるが故にのみ、破壊もし撲滅もする処の永遠の精神に吾々自身を任せやう。破壊の慾望は、同時に創造の慾望である」

そうだ、創造の芸術は同時に破壊の芸術ではないか。破壊なしに創造は行はれない。總て破壊の使徒バクニンあつて初めて破壊が道徳となつたのでは無い。鮮血に塗れずには赤子は此世に産れ得ない。「流血の惨」といふ語は此場合には嚴禁の凶語である。流血こそ真に賀すべき新生命發達の吉報

ではないか。クロボトキンは「トルストイが一生涯欲求した処の完全な人類愛、静肅な献身、清節の理想を、極めて自然に單純に其生活上に実現した」とロマン・ロオランは言ふが、併し、此巨人を生むべく、露西亞はどれほど「流血の惨」を重ねたことであらう。ツァーリスムといふ暴圧の露國の鉄壁を破つて出て、そして世界の人類に自己を投げ与へたクロボトキンや、バクニンや、ヘルツェンやの苦闘、といふものは、「自然」であつたらうが、併し、尋常ではなかつた。

四

トルストイの芸術は其深刻な悩みから自然に生れた。クロボトキンの生活の芸術、トルストイの芸術の生活、觀来れば、何れも血痕淋漓たる闘ひのレコオドである。

あゝ、生きることは、其発端からして流血の苦闘だ。若し文芸といふものが、生命に即したものであることを要するならば、それは矢張り闘ひの芸術でなくてはならぬ。闘ひのない処に芸術はあり得ない。芸術は即ち戦ひである。

五

そうだ、芸術其ものが戦ひであると同時に、芸術は更に新らしい戦ひを世界に投げ与へるべきである。明暗の間に挟まれ、神と惡魔とに挾撃され、慾と愛とに引つばられて、明けても暮れても、或は

日本の新聞紙は歐洲電報によつてチエルケソフの計を伝へたとの事である。私は、^{オーストリア}欧羅巴の友人から未だ何の通知にも接せず、新聞電報の記事も読まないが、友人延島英一君から其事を聞いて、且つ驚き、且つ惜しんだ。チエルケソフの名は、例の『共産党宣言』の種本』一件以来、日本の社会思想家の間には可なり知れ渡つた様に思ふ。チエルケソフといふ名はたしか本名では無いと思ふが、其本名を私は今記憶して居ないし（エリゼ・ルクリュがクロボトキンに送つた手紙に、チエルケソフを Varlaan と呼んで居るが、之れが果して幼名であるか又は姓であるかと今判明しない）、又西歐諸国ではチエルケソフといふ名が既に普及して居れば、私は矢張り此名を用ゐる。

一 チエルケソフの名

チエルケソフを憶ふ

犬の如く走り、或は狼の如く略奪戦を用意してゐる人間世界は其戦ひを超越した静安の福音をさへ求めてゐる。それほど此世は戦ひに満ちてゐる。それほど戦ひに疲れてゐる。『Au-dessus de la mêlée』を公けにして絶対平和を提唱したロマン・ロオランこそ実に此間の消息を明知した一人である。然るに此平和の使徒ロオランは、革命戦の驍将クロボトキンを慈父の如くに尊び其受けし感化に感謝してゐる。蓋しクロボトキンほど平和静粛に長き戦ひを続けたものは稀有だからであらう。平和の宣伝者であつたトルストイが常に心中の戦ひに苦んだに反して革命戦の闘士たるクロボトキンは常に光風霽月^{せいげつ}の如き平和の心の持主であつた。そして其平和を渴望する苦闘の心裡にも戦闘を喚起する和平の心裡にも、ともに止み難い人類愛のインスピレーションが漲つてゐるので、其の鉄筆の影を追ふて絶大の芸術が生れ、其足跡の及ぶ処、必ず人生の詩が遺されるのである。大きな詩、大きな芸術が生れるには、鮮血に塗れた長い長い苦闘が戦はれねばならぬ。愛の為に、人類愛の為に。